

6月4日 主の昇天

使 1:1～11 エフェ 4:1～13 マコ 16:15～20

1. マコ

vv.15-16 「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。」

このみことばが、再び現代に力を持つようになるためには、天に昇られて神の右に座したもう主イエス・キリストから、聖霊が送られてこなければなりません。私たちが歩んで来た 20 世紀のキリスト教は、聖霊の働きの希薄なキリスト教であったということを認めざるをえません。

vv.19-20 「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。一方、弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。」

これらの聖書のことばが、私たちが体験して来た現実のキリスト教の実感とは、かなりかけ離れていると言わざるを得ないように思うのです。

私たちが毎主日に歌う“栄光の賛歌”の中に、“父の右に座したもう主よ、われらをあわれみたまえ”とあるように、“天に上げられ、神の右の座に着かれた”復活の主に向かって、私たちは今朝目を上げようではありませんか。

2. 使

使徒言行録を読むと初代教会は、使徒たちおよびその指導のもとに奉仕する多くの働き人たちが、聖霊の力強い導きによってミサをささげざる群を造り上げて行ったものであることが分ります。彼らがキリストの証人、キリストの福音の宣教者として、短期間のうちの初代教会を造り上げて行ったその原動力は、“天に上げられ、神の右の座に着かれた”復活の主から送られる聖霊の力でありました。

聖霊は「父の約束されたもの」(v.4)、“父なる神が教会に送ってくださるもの”という表現と並んで、聖書には“主イエス・キリストが父なる神のもとから送る”という記述があります(ヨハ 4:16, 15:26, 16:7)。

4 世紀後半になって確定したニケア・コンスタンチノーブル信条は、「聖霊は父と子とともに拝みあがめられ」と、その神性を明言していますが、6 世紀末のトレド会議はこれに「聖霊は、父と子から出て」を加えました。

福音の証言と、それに基づいて教会が造り上げられて行くことは、聖霊の働きによるのだということを、21 世紀に向かう教会は再び思い起こさなければなりません。

3. エフェ

v.12 「こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、……」

この“造り上げる”という言葉は、元来は家を建築するという場合に用いられるギリシア語“オイコドメオー”です。使徒パウロはそれをミサを守る群を育てることに当てはめて、彼の手紙の中で使いました。

代々の教会に使徒たちの後継者である司教たちがいて、それに従属する司祭たちと共にその務めを果たしているのは、この“教会を造り上げてゆく”ためです。これらの人々は、父なる神の右に座したもう復活のキリストから送られて来る聖霊によって、育てられ用いられているのです。

同様に、教会のいろいろな働きのために奉仕している信徒たちも、その奉仕が“教会を造り上げて行く”ことになるのは、復活のキリストから送られて来る聖霊の働きによるのです。

地上に受肉して、御自身を十字架のいけにえとして献げられた主イエス・キリストは、墓から復活して父なる神のもとに昇天されました。

v.10 「この降りて来られた方が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも更に高く昇られたのです。」

この天上のイエス・キリストが父なる神のもとから聖霊を送ってくださるとき、私たちの教会は“造り上げられてゆく”こととなります。

4.

20世紀の私たちの教会は、聖霊の働きの希薄な教会であったと認めざるを得ないかも知れません。しかしそれならば、私たちは21世紀の教会のために聖霊を送ってくださるように、天に昇って父なる神の右におられる復活のキリストに向かって、目を上げたいと思うのです。このキリストは、「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」(使1:11)方です。

既に1956年、当時の教皇ピオ12世は典礼刷新に当たって、「聖霊が人々を恵みの泉に近づけようと、現代の教会を訪れてくださったのです」と述べられました。

21世紀の私たちの教会を、来たるべき神の国を受け継ぐ“キリストの体”に造り上げて行くために、天のキリストが父なる神のもとから聖霊を送ってくださるように、目を上げようではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

6月11日 聖霊降臨の主日

使 2:1~11 ガラ 5:16~25 ヨハ 15:26-27, 16:12-15

今年も聖霊降臨の主日を迎えました。主イエス・キリストの受難と復活によって始まった教会の誕生と成長が、今も信じる民を通して前進し、よい実りをもたらすように祈りましょう。

1. 使

最初の聖霊降臨の日の出来事について、聖書はそのイメージを非常に象徴的な話法で伝えてくれています。その第一は、使徒たち一同が“聖霊によって語り始めた”ということであり、第二には人々が“めいめいが生まれた故郷の言葉を聞く”ように、使徒たちの語る“神の偉大な業についての宣教”を理解したということです。

私たち教会にとって、宣教とは“使徒たちの宣教”であり、その内容は“キリストの福音”であることを、一緒に再確認したいと思います。

2.

20世紀の私たちの教会は、聖霊の働きの希薄な教会であったと認めざるを得ない……と、先週の聖書の学びで話しました。そこでは使徒継承ということが一般の信者にとって実感の湧かない事柄となり、教会の教えは“使徒たちの宣教”とは何の関係もないもののように理解されて来ました。十字架と復活の主であるキリストと何の関係もないような“ほかの福音”(ガラ 1:7)が、信者たちの心を支配して来ました。

初代教会の宣教とその成長の原動力であったその同じ聖霊が、再び21世紀に向かう現代の教会に訪れてくださって、その司教と司祭たちによって“使徒たちの宣教”を継続させてくださるよう、一緒に祈りたいと思います。

3. ヨハ

聖霊は神であって、父と子と共に私たち教会の礼拝の対象であります。この方は「父のもとから出る真理の霊」(v.26)であって、“イエス・キリストによって実現した救い”について証しし、初代教会の“使徒たちの宣教”を支え導かれました。現代の教会における使徒継承を支え導かれるのも、この同じ聖霊なる神なのです。

この世にはもろもろの霊が働いていて、人々はそれらの中に生活していますが、キリストの祭壇を囲んでミサをささげる群である教会には、「その方、すなわち、真理の霊」(v.13)が来てくださって、キリストの福音の真理へとこれを導いてくださることを、今朝の福音書のテキストは語っているのです。

私たちは一方では過去の教会のありのままの姿を直視しなければなりません。20世紀の教会は聖霊の

6月18日 三位一体の主日

申 4:32～40 ロマ 8:14～17 マタ 28:16～20

1. ロマ

今日の主日に、全世界でミサをささげるためにキリストの祭壇のもとに集まっている、文化や言語の違ういろいろな国の人々のことを、今朝の第二朗読の日課は「神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です」(v.17)と述べています。ミサ聖祭の“ことば”と“しるし”を通して神の霊によって導かれている私たちは、“御子イエス・キリストの血によって贖われた神の教会”(使 20:28)であるからです。神の教会ですから、やがて将来終末の裁きを経て実現する神の国を、キリストと共に相続するのです。

私たちの信仰の人生には、いつも多くの苦労や困難がつきまといまいます。しかし「キリストと共に苦しむなら共にその栄光(の国)をも受ける(相続する)」(v.17)ことを私たちは信じており、ミサを通して働き給う聖霊はこのことを私たち一人一人の心に証ししてくださいませ。

このような希望の上に立って、私たちは互いに励まし合い、共に手を取り合って、私たちの教会をより良いものに造り上げて行きましょう。

2. 申

旧約のイスラエル、特にユダヤ教と呼ばれるようになった紀元前4世紀以降のイスラエルの民は、律法の民であるという特性を強く持っていて、今日の旧約聖書が彼らの聖典でありました。キリスト教会はこのユダヤ教のイスラエルからその聖典を受け継いで、新約聖書とともに自分たちの聖書としたのです。

私たちがキリストの福音と神の国の希望と、そしてミサを中心とする信仰生活のことを理解するために、この旧約聖書は非常に有益な書物であって、主日ごとのミサにおける朗読ではその日の福音の箇所との関連で選ばれた旧約の日課が配分されています。

今朝の申命記の日課では、イスラエルの選びについての記述に続いて、次のように述べられています。

vv.39-40 「あなたは、今日、上の天においても下の地においても主こそ神であり、ほかに神のいないことをわきまえ、心に留め、今日、わたしが命じる主の掟と戒めを守りなさい。」

私たちは唯一の救い主イエス・キリストの福音に聞き従うことと、神の国の希望の上に固く立つことを、この日課から教えられます。

イスラエルにとって、パレスチナは神が彼らに受け継がせてくださった約束の地、エルサレムはこの民が神を礼拝する聖なる都です。この信仰によって現代のイスラエル共和国が再建され、今日の非常に困難なパレスチナ問題が生じて来ました。私たちは一方では、神がパレスチナの地を古きイスラエルに約束されたという旧約聖書の証言を神の救済史の事実として受け入れるのですが、他方においてこの約束の地についての旧約聖書の証しが、イエス・キリストによって将来実現する神の国を指し示しているというふうに理解します。旧約聖書において約束されているすべてのものは、最終的にはイエス・キリストによって将来の神の

国で実現するのだということを、教会は信じているのです。

3. マタ

私たちが受けた洗礼の秘跡は、“父と子と聖霊の名によって”行われました。私たちがミサをささげ、教会をより良いものに造り上げて行くのも、“父と子と聖霊の名によって”です。御子キリストと共に神の国を相続する教会は、唯一の神を三位の栄光において賛美しつつ、地上の旅路を歩んで行きます。

アーメン、ハレルヤ。

6月25日 キリストの聖体

出 24:3~8 ヘブ 9:11~15 マコ 14:12-16, 22-26

キリスト教会はその始まりから今日に至るまで一貫して、聖体の秘跡を共に守る群であり続けて来ました。新約聖書ではこれを「主の晩餐」(1コリ11:20)「パンを裂く」(使20:7)などと呼んでいます。既に2世紀の初め頃には“感謝”という意味の“ユーカリステア”というギリシア語が使われるようになりました。私たちがミサを“感謝の祭儀”と呼び、さらにその中心である聖体の秘跡を“感謝の典礼”と呼ぶのは、これに由来しているのです。

1. マコ

w.22-24は、もしかするとv.25も含めて、マルコ福音書を生み出した1世紀後半の教会のミサの式文であろうと思われます。ミサを司る司教や司祭は、目に見えない祭壇のキリストに代わって、キリストの聖体であるパンとぶどう酒を会衆に分け与えました。新しい契約のいけにえとしてキリストの聖体が奉献される感謝の典礼は、教会がキリストの死と復活をどのように理解し、どのように語り伝えて来たかを明確に証しています。

新約聖書はこのような“ミサをささげる教会”から生み出された書物ですから、教会が今日に至るまで使徒継承によって受け継いで来た信仰と典礼に固く結びついています。私たちは主日ごとのミサに与かる歩みの中でこそ、教会の信仰と典礼の光に照らして、聖書をより深くまた正しく理解することが出来るのです。

私たちが司教や司祭の手を通して受けるパンはキリストの体、感謝の杯はキリストの血です。これは信者に永遠の命を与える糧であって、主はこれを受ける人々を終わりの日に神の国に復活させてくださいます。

2. ヘブ

モーセがシナイ山で律法を受けて主と民との間に結ばれた古い契約においては、動物のいけにえの血が“契約の血”(出24:8)として注がれました。しかし新しい契約の仲介者(v.15)であるイエス・キリストは、御自身を献げることによって、私たち教会のために永遠の贖いを成し遂げ(v.12)てくださいました。ヘブライ人への手紙は「人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋……(天の)聖所に入って……」(w.11-12)と述べて、教会の中で主日ごとに記念され再現される聖体の奉献の意味するところを説明しています。この天の聖所で父なる神の右に座したもう主イエス・キリストは、やがて終わりの日に再び来て、ミサをささげる私たち教会に神の国を受け継がせてくださいます。

3.

教会がキリストの聖体を奉獻するミサを共にささげる度ごとに、そのことによって教会はいつも“キリストの贖いの死”を公に宣言して来たと言うことが出来ます(Ⅰコリ11:26)。聖体の秘跡はこれに与かる信者たちだけの私的な礼拝行為ではなくて、実は同時に教会が外の世界の人々に対して証しする“キリストの贖いの死”の宣言でもあるのです。

新約聖書に描かれている初代教会の姿は、彼らが主日ごとにささげているミサの意味を積極的に外の世界の人々に説明し、証しし、宣教するものでありました。

v.15 「キリストは新しい契約の仲介者なのです。」

今年も聖体の祭日の朗読聖書は、私たちの教会が21世紀に向かって、“キリストの贖いの死”を宣言する教会となって行くことを励ましてくれるのです。 アーメン、ハレルヤ。